

晩年のシェルドン

1921年の「ロータリー哲学」という論文発表を最後に、シェルドンはロータリーの世界から、その姿を消しています。そして1930年にはシカゴ・クラブを退会し、1935年に亡くなります。

この1930年に退会したことを巡って、シェルドンに対して非難を浴びせる声をよく聞きます。ポール・ハリスやチェス・ペリーが死ぬまでロータリーに在籍していたことを引き合いにして、なぜ途中で退会したのかという非難です。シェルドンの親派からすれば、ロータリーに対する理念の提唱者として、最後までロータリアンでいてほしかったという願望もあると思います。

そこで、日本でただ一人シェルドンの文献を50冊近く収集して、その内容を分析している、すなわちシェルドン研究の関する第一人者を自認している私としては、ぜひとも、シェルドンの立場を弁護しておきたいと思います。

1908年にシェルドンが入会する前のロータリーは、当時雨後の筍のように出来た親睦と物質的相互扶助に明け暮れた平凡な社交クラブの一つにしか過ぎない存在でした。

そこにシェルドンは最も斬新で新しい経営学を導入しました。それは当時誰もが考え付かなかった、時代を30数年も先取りした修正資本主義の思考でした。

その考え方を素直に取り入れたロータリーは、大きく発展し、シェルドンは一躍ロータリーの寵児としてもはやされました。当時の年次大会はシェルドンの記念講演なしには開くことができませんでした。

ロータリーの理念もシェルドンが提唱した **He profits most who serves best** が唯一のものであり、フランク・コリンズが発表した **Service not self** は、**He profits most who serves best** を別の角度から説明してものとして片づけられました。

ロータリーの奉仕理念はシェルドンが提唱したいわゆる経営学や販売術の理念に限定され、社会奉仕的なものは議論の対象にすらなりませんでした。

ところが1915年ころから状況が徐々に変わってきて、**Service above self** や **Service before self** などの詠み人知らずの奇妙なモットーが出現して、やがて、**He profits most who serves best** と互角の立場にまで、幅を利かせるようになってきました。

自分がライフワークとして築きあげてきた経営学に裏打ちされた奉仕理念 **He profits most who serves best** と誰がいつ作ったのか、その真意すら判らない **Service above self** が互角に並んだことは、シェルドンにとって許すことのできない一大事だったに違いありません。その証拠に、シェルドンの何万ページも及ぶ全ての文献をくまなく調べても、**Service above self** というフレーズを見つけることは全くできません。あえて、**Service above self** という言葉を避けて、文章を作ったとも考えられます。

さらに1921年ごろから、対社会的奉仕活動が重視されるようになってロータリーの性格は一変しました。シェルドンは1921年にエジンバラで開催された年次大会で「ロータリー哲学」というスピーチを行ったのを最後に、ロータリーの公式の場からは姿を消し、それ以降はロータリ

一とは関わりを一切絶っています。

ここで考えなければならないことは、シェルドンが社会に及ぼした影響力についてです。当時のロータリアンの数は全世界で僅か 7 万人に過ぎません。それに対してシェルドン・スクールの卒業生は 25 万人とされています。

シェルドン・スクールの卒業生名簿にはチェスレー・ペリーやジョン・ナトソン、ジョージ・ピンカム、ロバート・デニーなどの著名なロータリアンの名前も含まれています。

自分がここまで育てあげた組織であるがゆえに、ロータリーのために誠心誠意奉仕をしてきたのに、理論の整合性を欠いた自我を主張し始めたロータリーに、これ以上自分の力を割く必要はない、それよりも事業の発展のためと自分の助けを求めている大勢の人のために尽くすべきだと、シェルドンは考えたのではないのでしょうか。

これ以降、シェルドンの総力は、ロータリーを離れて、シェルドン・スクールに向けられます。

1923 年に採択された決議 23-34 は、シェルドンとロータリーとの関係を決定的に壊しました。

それは経営学としての学問的裏付けのある **He profits most who serves best** と、単なるはやり言葉に過ぎない、**Service above self** が、対等の立場でロータリーの奉仕哲学として採択されたからです。

さらにその後は毎年のように **He profits most who serves best** を廃止して、**Service above self** をロータリーのモットーしようという決議案がイギリスから提出されます。もっともこの決議案はそり都度否決されたので事なきを得ました。

1927 年にオステンドで開催された国際大会で、四大奉仕に基づく委員会が設置されることになり、それまではロータリーの奉仕理念のすべてであったシェルドンの理念は、職業奉仕という四分の一の狭義な理念に追いやられてしまいました。

職業奉仕の英語名が **Vocational Service** であることも、シェルドンにとって屈辱的なものでした。**Vocational** という表現は職業を天職と考えるイギリスやヨーロッパの考え方であって、シェルドンの修正資本主義に基づいた経営学としての職業感とは全く異質なものであったからです。

シェルドンが考え出した経営学を採用したがゆえに、ロータリーはここまで発展したのに、何をいまさら天職論を持ち出すのかという心境だったと思われれます。ちなみにシェルドンの文献には **Vocational Service** とか **Vocation** という言葉は一切使われておらず、すべて **Occupation** に統一されています。

1929 年のダラス大会で決定的な事件が起こります。イギリスから出されていた **He profits most who serves best** を廃止しようという決議 29-7 が、賛成と反対が伯仲して、危うく採択されそうになりました。その賛成票の多くがアメリカから投じられたことは、シェルドンにとって大きなショックであったことは否定できません

同じ国際大会で、身体障害児童の救済事業をロータリーの最優先課題として実践することが決定したことによって、ポール・ハリスとの意見対立が決定的になったことも、シェルドンが退会する直接的な動機になったのかも知れません。

今 **He profits most who serves best** がその魂を抜かれて形だけの存在になって、シェルドンが提唱した経営学の偉大さを知る人もほとんどいなくなり、ロータリーのあらゆる活動が **Service above self** という人道的奉仕活動で動いている現実を、シェルドンが知ったら、どんな反応をするのでしょうか。

案外、そんなロータリーと適当なところで手を切っておいて良かったと、胸をなぜおろしているのかも知れません。